

# 大友宗麟の実像

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】



大友宗麟公像  
(JR大分駅前)

## 第6回 名品コレクター「宗麟」

薩摩(現鹿児島)島津氏が、豊後に迫りつつあった1586(天正14)年4月、宗麟が大坂城に豊臣秀吉を訪ねたときのこと。秀吉が当時、茶の湯の第一人者であった千利休に「宗麟は茶が好きか」と尋ねたところ「なかなかの<sup>すきもの</sup>数寄者です」と答えています。

茶の湯の世界ではその心を理解し、道具そろえや茶席の設定で表現できる者を数寄者と呼びます。宗麟の茶の湯への執心さを示すエピソードの一つです。

また、茶の湯では茶席を飾る道具と<sup>ぼくせき</sup>絵画、墨跡が欠かせません。

宗麟は、博多の商人などとの交渉を通じ、大きな労力と大金をかけ、国内の各地から、名品を収集し、茶道具コレクションを充実させていきました。



上杉瓢箪(京都・野村美術館蔵)

大友宗麟旧蔵の茶道具。古くは大友瓢箪と呼ばれたが、後に豊臣秀吉から上杉景勝に伝来したため上杉瓢箪と名付けられた。

江戸時代に記された『大友興廢記』には、宗麟の所持していた茶道具14点、絵画・墨跡19点が記されています。この内、現存しているものは徳川博物館(水戸)が所蔵する「<sup>にったかたつき</sup>新田肩衝」、野村美術館(京都)の「<sup>ひょうたん</sup>上杉瓢箪」と呼ばれる瓢箪茶入れ、出光美術館(東京)の<sup>ぎよくかん</sup>玉潤作「<sup>しせいらんず</sup>山市晴嵐図」の3点のみで、いずれも名品ばかり。

こうした名品の収集には、南蛮貿易によるばく大な利益が充てられたと考えられ、宗麟の経済力と茶の湯という当時の文化的教養への関心の高さを物語っています。